



町民C、勇者様に
拉致される 3

つくえ

Tsukae

RB

レジーナ文庫



しろ
◀ 始原の勇者(白さん)

神出鬼没の、世界を徘徊している人物。
町民Cに世界の歴史などを教えた。

世界の外にいる▶
「彼女」

町民Cの記憶の「欠片」
を集めている謎の女性。
始原の勇者とは昔馴染。

▲ 幽霊さん

幽体離脱した
町民Cが図書室で
出会った幽霊。

▼ 王子

華姫の弟。アンニユイ
で目つきが悪い。

はなひめ
▲ 華姫 ▲

第一王女。
おしゃれと噂話にしか
興味がないように
見えるが……

▶ 勇者 ▶

町民Cを連れ、魔物退治の
旅をしている。
とても強いが、無表情な男。
深蒼の勇者と呼ばれている。

▲ 神官

勇者とは幼馴染で、
ともに旅をしている。
博識で美形だが、
寝起きは悪い。

▲ 町民C

平凡な一庶民だったが「神子」と
呼ばれるようになり、勇者たちの
世界を救う旅に同行している。
心の中では常にツッコミが暴走中。

登場人物
紹介

私は夢を見ない。

だから夢の代わりに、あの子が世界の中で過ごすのを見ることにした。人間の生活がどんなものか、私は聞いたことがあるだけで、実際のところを知らないのだ。

あの子の目で見た世界は、残酷なこともあるけれど、とても温かくて優しくかった。その夢を通して眠っている神様にも、そんな世界の姿が伝わってあげたいと願う。私は私なりに、ずっと見守ってきたこの世界を愛している。

最近、何も見えない眠りを繰り返し返していた。夢の代わりに見ていたあの子の日常も今は見られないから、ただの意識の断絶だ。あの子も眠りについていてるから仕方がない。私の意識が久しぶりに浮上した時、珍しいことが起きていた。

「起きたんだ」

寝転ぶ私を、彼が上から覗き込んでる。昔馴染みだ。フードの陰で、口元が笑みの形

0 彼女、お別れをする

になっているのをぼんやりと眺める。彼がこんなに立て続けに訪れることなんて、ここしばらくはなかった。

「どうしたの」

何かあったのだろうか。私は寝転んだまま問いかける。起き上がることはもうできない。そのまま話しかければ、彼は私の状態を察したようだった。

「……もう、時間は残っていないのかい？」

気遣わしげに問いかけられた言葉に、私は笑って返した。

「それほど、差し追ったものじゃないよ」

「そんな状態なの？」

返ってきた声は不満そうだ。でも、しかたがない。

「こんな状態だから、あとどれぐらいかはわかるよ。その時までは、大丈夫」

そう続けると、彼はわざとらしく溜息をつく。

「君が言う残り時間が、人間の時間で言えばあとどれぐらいなのか、漠然としすぎてわからないから困るんだよ。君の時間感覚は、ずれているから」

そうは言っても、そもそも、この時間の流れ自体が不規則なのだから仕方がない。

世界の外というのはそういうものだ。自分ではそこまでずれているとは思わないのだけ

れど。

「そう？ ずれてるかな」

「ずれてる」

何度も言われると、そうなんだろうと納得してしまふ。だけれど、いまさら直しようがない。もともと、私は時間というものには、なじみが薄いものだから。

でも一つだけはわかる。彼の方こそ、ここにいられる時間は少ないのではないだろうか。数日が一瞬で通り過ぎるここに、長居することに利はない筈だ。いろいろ差し追った状況のようなのに。

「こんなところでいて、大丈夫なの？ 大事な時間に遅れたりしない？」

「それぐらい自分で管理している」

それならいいか、と納得する。それにしても、と私は彼を上から下まで眺めた。彼の体は**ずいぶん**妙なことになっている。

「その体はどうしたの。結構、状態悪いよね」

気になっていることを指摘すれば、わずかな沈黙の後に、

「君相手に隠せるものでもないか」

と苦い口調で言葉が返ってきた。幾ら布地で覆ったとしても、私**が**わからないはず

ない。彼の周囲にうつすらと漂う瘴氣。あの子が見たら、ピンクまみれだと言うに違いない。少し想像してしまった。

「浄化しようか？」

提案すれば、いらないと手振りで断られた。自分で何とかできるんだろうか。しげしげと眺めていると、呆れたように彼が言った。

「そんな病人みたいに転がっている君の手を借りずとも、どうにかすることが出来る」
「……大きくなたねえ」

感心する。私の眩きに、文字通り彼は頭を抱える。そして、妙に打ちひしがれた声を出した。

「君の中で僕は一体いくつの子供なんだ」

「初めて会った時は、私の胸ぐらいの身長だったし。小さくて、ぎゅっとしやすく、可愛かったのに」

いくら普通の生物の枠から外れたといっても、成長は止まっていない。ただ、神様に時間が引き延ばされただけで、不老不死とは厳密に言えば違うのだ。何千年もかけて、彼は緩やかに大人になった。私が女性を選択したのもあるだろうけれど、背はいつの間にか追い越され、性差による体格差が生まれた。

いつの間にか私の手も必要としないくらいに大きくなったな、そう考えながら彼を眺める。身長が追い越されたのが少し悔しい。

「私も男にしたらよかったかな」

と眩げば、なんとも微妙な沈黙が返ってきた。

「……その姿の方がいいと思うけど」

「筋肉とか、憧れたりしたんだけどな」

「君の憧れはいつたいたいどこにあるんだい。それに今更、男性の君は想像できない」

そんな風に言われてしまった。私は自分が男性だったら、と想像しようとしたが、彼の声に遮られる。

「君が過去を振り返るなんて、珍しい」

「そう？」

ここ最近、過去を振り返ってはかりいる。世界の記憶の欠片に埋もれながら、過ぎ去った時間を振り返る日々。これも悪くはない。指摘されて気づく。確かに、前はそんなことを考えたことがなかった。彼の方が私のことをよく知っているようで面白い。彼は私の周りに散らばる光の欠片を眺めた。

「過去も愛しいものだなって、最近思い始めたの」

「だから、神子の記憶を集めている？」

「そう。楽しい思い出は、忘れない方がいいんじゃないかと思って」

私は周りの欠片を、さらりと撫でる。楽しい記憶が光っていた。いつかは神子にこれを渡す時が来るだろう。それは、遠くない未来であってほしかった。どのような道をたどって彼女がここに来るかはわからない。もし来なかった場合は力づくになるかもしれない。

私たちには、もう時間が残されていないのだから。

「先のことを楽しみにするのもいいかなって、最近は思えるようになったよ。あの子に会うのとか」

「君は……前向きだね。なんだか、しみじみ実感したよ。そういうところが特に似ている」

はあ、と溜息をこぼしながら、彼が言った。そうか、そういうところが似ているのか。妙にうれしい。じわじわと笑みがかほれる。

「まずは会える日が楽しみになってきた」

笑う私を、笑みを消した顔で彼がじっと見つめる。空気が変わる。

「どうしたの」

見上げて問えば、

「今回でお別れだ。僕はもうここには来れなくなる」

と返ってきた。

そうか、お別れか。軽く目を閉じれば、いろいろなことがよみがえってくる。あと少して、私の生も終わり。胸を突くこの感情が、未練や感傷というものであったとしたら、それは彼によってもたらされたものだ。

「……そうだね、もう時間も残り少ない」

切なさに似ているそれを押し殺して、私は手を伸ばす。

「起こして」

「……気づいているだろうけど、僕に今触ったら、君がさらに弱る」

そう言ってこちらに来ない。その程度、大したことじゃないのに。

「いいから」

強引に促せば、私の手を取り、上半身を支えてくれた。ばかりと音がする。彼が身に残す瘴気が私と反発し、昇華する音だ。それに気づいた彼が身を離そうとするが、私はその服をつかんで逆に抱きついた。

「わ」

大きく音が弾ける。飛びかかった私の重さで、彼がバランスを崩し、後ろに倒れこん

だ。見事に押し倒してしまった。痛くはない。彼が受け身を取りながら、私を支えてくれたようだった。

「おお」

「おお、じゃないよ全く！ 何千年たっても慎みを身につけてくれないのか、君は！」

それは、初めて逢った時に言われた言葉だった。あまりの懐かしさに、私は笑う。

「笑い事じゃなくて……ああ」

諦めたのか、それ以上小言を口にはしなかった。彼は額に手を当てて、深く溜息をついて、やがて、私の笑いが収まるのを待ってから言う。

「……本当に、今ので君に負担はいかなかっただろうね」

多分瘴気を浄化してしまった件だろう。

「それほどやわじゃないよ」

私を軽く見られても困る。そのまま彼の胸に耳を当て、心臓の音を聞いた。こうして私が動きを止めると、いつも諦めたように私の頭を撫でる。それは、私の背を彼が追いついた頃から始まった仕草だった。これで、この音を聞くのも、最後。

音を聞きながら、口元が緩んで自分が笑っているのがわかる。なんてしあわせなんだろう。

「私は、始原に逢えてしあわせだったよ。今まで、長い間、ありがとう」

万感を込めて伝えれば、返ってきたのは沈黙だった。

そして、やがてぼつりと、眩きが落とされた。

「こちらこそ、……今までありがとう」

彼が減多に口にするのがなくなった、素直な言葉だった。

私の耳に、時間がきしむ音が聞こえた。

「そろそろだね」

私はずり落ちるように横に転がり、先ほどと同じ場所に寝転ぶ。のろろと身を起こす彼を見上げた。

「少し、眠るね」

「ああ、そんな時間になったのか」

上を見ながら、彼も呟いた。お別れの時間がとうとうやってきたようだ。

「ね！ 家族みたいに、おやすみの挨拶をして！」

「……君の無駄知識を増やしてしまったことが、いろいろ悔やまれるよ」

ねだる私に、彼が頭を押しさえながらうめいた。失礼な。欠片やあの子からいろいろ知っただけなのに。じっと見上げていたら、凝視されるとやりにくい、目をつぶれと指令が

飛んだ。目を閉じたら、すぐに眠ってしまいそうだ。意識を飛ばさないようにしながら、目を閉じればまぶたに柔らかな感触が降ってきた。想像以上にすぐぐったいそれに、私は笑い声をあげた。

ありがとう。

私は、最後の挨拶を口にする。

「おやすみ」

「おやすみ。……よい目覚めを、願っているよ」

吐息のような言葉とともに、彼の気配が消える。私は彼がここから帰っていったことを感じ取り、もう聞こえていないだろうけれど、改めて眩くらいた。

「おやすみ、さよなら」

そして、私の意識は深い底へ沈んでいった。

1 神子みこ、まさかのジヨブチェンジ

うわあああああ！ 寝坊しましたあああ！

なんといつても周りが明るい！ これは確実に寝坊、遅刻、最悪の事態ですよ！

そう考えて飛び起きた私は、窓の外の風景を見て別の悲鳴を上げそうになりました。

ここ、どこですか！

まだ心臓がどきどきして落ち着きません。うう、明るい時間帯まで寝てしまうの、まだまだ慣れません。明るいイコール遅刻！ 最悪！ って考え方が染みついています。だてにパン屋の店員歴は長くないからね。早起きは数少ない得意技です。最近をよく昼寝とかしちゃうけど、それにしても……寝すぎじゃありませんか、私。

最近居眠りばかりしすぎて、気がついたら勇者様に運ばれたり、陸馬うまさんに運搬されたりしてたんだよね。椅子に座って、寝こけるとかもうね……いろいろ、乙女として危険な気がしますよ。乙女って言葉がものすごくむなしさを感じますがっ。

でも、目が覚めて、ここまで一気にガラッと景色が変わったことはありませんでした。

本当にここはどこなんだろ。……また、さらわれたとか？ でも最後に覚えているのは荒野だったし、勇者様も神官様もいらっしやっただけ。荒野で眠気に襲われて寝ちゃったのに、知らないお部屋へご招待！ いったい何が起こったんですか。全く訳がわかりません。

窓ばかり見てた私は上半身だけを起こしたまま、ようやくぐるっとお部屋を眺めました。

そしてばかーんと口を開けました。なんですかここ。

目に飛び込んできたのは、キンキラしたお部屋でした。わお。すごいですね、天井にまで模様がありますよ。あんなところにお金をかけられるなんて、セレブの証です。

じゅうたんはふかふかの赤。壁にも模様がありますね。燭台ですらゴージャスです。金色ですよ！ ひい！ そしてここで、神官様としていた勉強の成果が発揮されます。

この葉っぱ模様は、星原樹ですね。形が特徴的なので見分けがつかず。さすがに私の記憶力がアレでも、毎日持っていたお枝様はわかりますよ。

星原樹の模様を使うのは、神殿ぐらいつて教えてもらいました。恐れ多いからあまり使われないとか。とすると、ここはどっかの神殿なのかな？ 星都とか。まさかね。どちらにしても、最後にいた街って、星都からはかなり離れてたと思うんだけどな。そん

な距離を移動したら、さすがにわかると思うんだけど。……いや、わからないかもしれないけど。私の鈍感力をなめてはいけませんよ。実際、これだけ移動してるのにわからないし。自分で言ってる悲しくなってきました。とりあえず、ここがどこか手がかりがないか、きよろきよろ見回します。

お部屋の中には私が寝ていたベッドが一つあるだけです。どうみてもここは寝室ですね！ 豪華すぎるけど！ 趣味はよくて、上品にまとめられています。やっぱり、星都の主神殿の雰囲気似てるんだよね。大きく開いた窓からは、緩やかに風が流れてきていました。レースのカーテンがふんわり翻って、ひらひら風と遊んでいます。ガンガンに晴れてるんじゃないかと、薄曇りの天気のようにです。雲で覆われた白い空から降りそぐ弱い陽の光が、ほんやりと周囲を照らしていました。

部屋を見回しても、残念なことに全くヒントはありません。

起きようかな、と思つて手をついた時、かすかに違和感を覚えました。あれ？ と思つて視線を自分のいるベッドに落とします。

思わず息が止まりました。

えーと、その……大変なことになっています。……見間違いないよね。

現実逃避をして窓の外を眺めます。庭の植木、元氣そうですね。葉っぱがツツツやし

ています。曇り空でもいい風が吹いていて気持ちが良いです。あ、遠くに見える屋根が青い。ん？ やつぱりここは星都かも。こんなに屋根が青いの、ほかでは見なかったし。落ち着くために、何度か深呼吸をしてみます。すーはー。よし。平常心に戻ったところで、問題のものを、恐る恐るもう一度見てみました。

私の下に、私がいいます。

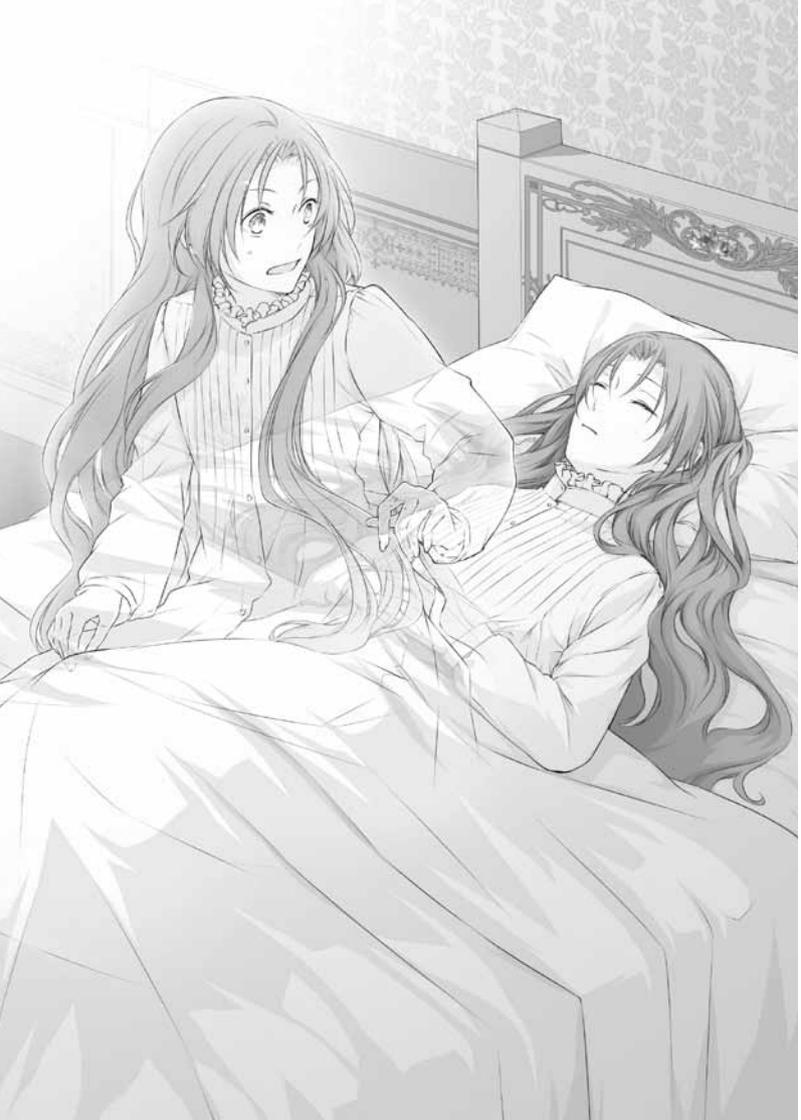
う、うん、ゴメン、混乱して自分でも何を言っているのかわからない。振り返って下を見たら、後ろに寝ている私がいるとか。

落ち着け。クールになるんだ！ 見間違いかもしれないしね！ もう一回、見てみよう。

ひい、やつぱりいますよ！

……どう見ても、鏡でよく見る自分の顔ですね。わあ、そっくりさんが寝てるー。じゃなくて！

それよりも何よりも、私を見下ろす私の体が、透けている方が問題だと思っただけどおおお！ まさにシースルー、すつけすけですよ！ 私は恐る恐る全身を観察してみます。起こしている上半身が、腰から生えているような状態です。なんでだ。じゃあ、こ



のまま後ろに倒れば戻れるかも！ ひらめいた私は、そのまま後ろの私へと倒れこみました。

が。
 ぽよんと弾かれて、上半身どころか全身私の体から追い出されましたあああ！ 凄
 いスプリングのベッドで跳ねたらこんな感じなんじゃないかな、つていうぐらいの弾か
 れっぷりです。

えええ、なんでっ、私の体はそれでしよう！ いいじゃないですか、戻ったって。そ
 れを追い出すなんて、ひどいです。といっても、文句をつける相手もないけどね。そ
 れにしても、体に入れませんよ。むむむ、私の体め、どうしてくれよう。自分の体の横
 に座り込み、ぐるぐる考えます。でも何も思い浮かばないよおお。頭を抱えてベッド
 の上で転がっていると、自分の体に触っちゃったのか、またぽよんと弾かれました。
 うう、地味に辛い。

私はごそごそと寝台から降りました。もう一度勢いをつけて、体の上にダイブ！
 が。またぽよんとした何かに阻まれます。うう、ここまできたら意地になるよ！

半透明のまま、ベッドサイドに立って自分を見下ろします。変な感じ。もしもし、私
 はそこに帰りたいんですが……といっても通じません。当たり前だ！ 半透明だけど、

服はちゃんと着ていました。寝台にいる私と同じ、真っ白なネグリジエです。ちょっと
 だけ装飾のある、すんとしたワンピース型をしていました。裸じゃなくてよかったね。
 できれば靴もあってほしかったけど、寝てる時に靴は履かないから仕方ないです。

噂に聞く幽体離脱というヤツなんでしょうか。何というレアな。物語の中だけじゃな
 いんですね。手を上げしげと眺め、その向こうに風景が見えるのに溜息をつきました。
 どう見ても、半透明。すつけすけです。

ど、どうしたらいいんだろう。
 まさかの霊体になつてしまいました……

はっ、とここで私は気づきました。幽体離脱じゃなくて、もしかして死んじやった？
 眠るような最期だったとかそういうオチですかあああ。最近、眠いと思っていいたら私と
 うとう永遠の眠りについちゃったんですか！

どうしよう！ でもどうしようもない！

死体だとしたら、この放置っぷりに領けます。そろそろお葬式始まっちゃうとか。誰
 が参列してくれるんだろう……って違う！ ここが星都だとしたら、パン屋の人たちは
 さすがに参列できないなあ。というかひっそりとした式でいいです。死体の私は放置さ
 れてるっばいから、密葬だと信じたい。こっそり、埋めるなり焼くなり煮るなりしてやっ

てください。それにしても、お葬式始まるのに、私こんなところで浮遊霊していいの？ 神官様とかに見つかったらさっさと除霊されそうです。無害な霊ですから、除霊しないでくださいねっ。

冷や汗だらけなこの事態に、汗もにじみません。やったね、汗は乙女の敵だったしね！ ウフフ、これで汗臭いとかとはおさらばですよ。ついでに、人生ともおさらばっぽいけどおやお！ こっちは想定外でしたっ。負けた、何かに負けた！

これなら太るとか我慢せずに、あれやこれや食べておけばよかった。あと、陸馬さんのブラッシング途中だったし、勇者様にご飯奢ってもらう約束を果たしてもらっていません。それに、葬式だと神官様に大きな迷惑をかけそうです。祭礼式典は星神殿の稼ぎ時だとおっしゃってましたが、私の葬式なんて、お金にならない仕事ですよ。すみません、私の給料を葬式代に使ってください。あ、あと神官様にお借りした本とか、荷物から適当に抜いちちゃってください。バッグの中には生ものが入っているので、処分してやってください。あれから何日経っているかわからないけど、腐っていると思われれます。他には何かあったかなあ。

といつても、伝えられないよね！ 何故なら私は現状、霊だから。物がつかめるかどうかもわかりません。どうしようもないという事実に身悶えます。こんなことならちゃ

んと遺言状書いておけばよかったですよ。分配する財産も何もないけどね！

うーん、意外と未練たらたらだなあ。こんなにも私は欲にまみれていたんですね。再発見です。

でも、こうやってできなくなつてからいろいろ考えるって、なんともいえない感覚かも。もう、普通にみんなと話したり、ご飯食べたり、走ったりすることができないんだなあって思ったら、胸の辺りがぎゅうつとなりますよ。辛いというよりは、悲しい。当たり前と思っていたものが、当たり前じゃなくなったショックが思ったより大きいみたいです。前、裏のおばあちゃんが言っていました。いつ死んでもいいように身の回りのものは整理しておくべしって。物だけじゃなくて、いろんな物事を整理して、きっちり方をつけなきゃ後悔するんだって。人生、何があるかわからないから。おばあちゃん、さすがです。今更言葉がじわじわ効いてきました！ 人生の深みが半端じゃない。そうだよ、後悔しない人生を送りたかったなあ。これからは、霊ですけどっ。霊生っていうの？

こんなに唐突に人生終了って、世の中って何が起るかわからないんですね……身に沁みます。

でも死因はなんでしょうね。若い身空で死んじゃった私、さすがに死因ぐらいは知っておきたいです。これからの健やかな死後の人生のために。死因は結構重要です。知ら

ないと霊友達ができて自己紹介ができませんしね。

途切れた記憶を掘り返してみます。むむむ、最後の記憶は浄化をしていたぐらい……かな。うーん。そうだとすれば、死体をお二人に運ばせたわけで。まさに申し訳ないです。平謝りだよ！ 今度お会いしたら土下座ですよ。お先にあの世で待っていますっ。一步先逝く町民ですよ。

それにしても、これだけぐるぐる考えても死因が思い出せません。

浄化をしました。そして、人生終了。

いや、間に何かあるでしょうよ！ もうちょっと覚えておこうよ。そこまで考えて、ひらめきました。死体を見ればわかるかも！ うつ、死体……自分のでも怖いんです。だってなんか霊が出そうじゃないですか！ あつ、私が霊か。じゃあ、大丈夫かな。

気を取り直して、転がっている自分を観察してみます。シャツが丁寧におなかの辺りまでかけられています。いい布ですね、高級なシャツみたいです。いや、今見るところはそこじゃないからっ。胸のところで手を軽く組んだ格好で寝かされています。こう、客観的に、横から見ると……私かなり胸ないですか？ もしかして、本当に水平ですか？ まさか。あおむけで寝転んでいるからとか、そう思い込みたいです。地味にシヨックを受けながら、横からコンプレックスの平原を見つめます。くうっ、何故ここが育た

なかったのか。生きている間じゃないと、成長できないのにね！ ということは、これから私はずっと霊だから育たないわけ。永遠にこの体形！ 泣けてきました……

顔色は死体の癖に結構いいです。髪は洗ってもらったのか、ふわふわになっています。さすがにみつあみじゃなくて、長いまま流しています。まるで元気に昼寝してみたい感じがですね。

……ん？ 寝てる？ じーっと凝視していると、わずかに胸の辺りが上下しているのがわかりました。あ、なんだ生きてるみたい。へー……って思わず私は二度見しました。え、生きてるの!?

生きてる……生きてる！ よかった……。私は思わずへたり込みます。じわりと涙が浮かんできました。霊だけど、涙は出るみたい。新しい発見だね！

死んだと思って混乱していた頭が、ちょっとだけ冷静になってきました。亡くなった方を見たことがあるけれど、そういやこない顔色していませんでした。なんで気づかなかったんだろう。あ、そうか、私が霊になってるから死んだと思ったんだね！ 早とちりですね！ うう、生きてるなら、なんでこんなことになってるんでしょうか。余計に意味がわからなくなってきました。見下ろしたつま先も透けています。直視しなければいけない現実って、こういうことですね。

まさかの空中遊泳ですよ。でもそれだけでしたがっ。そこから一步も動けやしないよ！ 気合を抜いたら、すんと床に落ちちゃいます。空中遊泳とか、ちょっと懂れでした。

部屋には、何も手がかりはなさそうです。とりあえず、ここにいでもしかたがない気がしてきました。部屋の外に行くしかないと思いますっ。よし！ 気合を入れるために、両手で頬を叩きます。自分は普通に触れました。でも痛くないんだよね。変な感じ。

部屋には一つだけドアがありました。ドアノブを持つとうると、スカッと空振りして思いつきりバランスを崩します。つっとお！ けそうになるところをなんとか踏み張ります。あ、頭だけ廊下に出ました。うう、まだまだ違和感が消えません。もうちょっとこの体に慣れたらどこにでも行き放題、覗き放題ですねっ。誰の秘密でも暴けそうな気がするよ！ しないけど。

頭だけ廊下に出てるのも気持ちが悪いので、そのままドアをすり抜けて部屋の外に出ます。やっぱり知らない廊下でした。こここのじゆうたんも、深い赤。んん？ 神殿のじゆうたんって、青ばっかりだった覚えがあります。といっても滞在一週間だし、勉強部屋に閉じこもってたから、神殿施設にはさっぱり詳しくないです。これは迷うな。どう考えても迷うな！ でも霊だから、壁なんてあっても障害になりません。

廊下を彷徨い、やつと建物の外の見えそうな部屋に着きました。上に小さな通風孔があつて、光がうつすら射し込んでいます。落ちないように気をつけて、さつきと同じようににゅつと顔を突き出してみます。ウフフ、傍から見たら壁から首が生えている状態！ まさにホラー！ これが夜だったら霧囲気バッチリなのに。外はやつぱり曇ってしまいました。首だけ出すと、空にそびえる星原樹の根が見えます。なんだか霞かかってみえにくいけど、あの樹の大きさはさすがに見間違いません。やつぱりここは星都ですね！ 一体何があつたのかはわからないけれど、戻ってきていたみたいです。よかった、やつと大まかな現在位置がわかりました。

けど……勇者様たちは何処へ行ったんだろう？ 忙しいから仕方ないのは知ってるけど、行き先がわからないのが少し寂しいです。まあ、寝こけている私はお荷物にしかありませんが。伝言もできそうにないし。

すんなりと壁抜けもできまし、この調子ならいろんな所へ行けそうです。
 気をとりなおして調査開始ですよ！

いつも迷ってしまうから、今日はきちんと目印を決めて歩きます。ちゃんと帰れるように覚えておかなきゃね。初めは青い壺を目印にしました。ここを右折。次はあのバケツを左。霊体なせいか、ものすごく体が軽いです。凄くすいすい廊下を進んでいきます。息切れ知らずです。勇者様のような体力セレブは、こんな感じなのかも。目印を覚えな

がら、気になったことを思い出ししました。

それにしても、さつき見た星原樹、ちょっとおかしくなかった？ 薄暗く見えたり、なんか見えにくい気がしました。霊になって私の目が悪くなったのかな。それとも本の読みすぎ？ あ、その理由は知的でいいかも。でも、今更メガネも発注できません！ 本当に生前にいろいろすべきだね。人生って難しい……

左、右、と覚えながら歩いてみると、廊下の先によくやく女の人たちが見えました。おおお、人、発見です！ とうとう出会いましたよ！

あの服って、姫様付きの人たちだよ。前にぞろぞろ出てきた人たちです。

仕事かな？ それにしては、固まってひそひそ噂話をしている様子。なんですか、私も交えてください。ついでに私が見えないかどうか実験してみます。

『こんにちはー！』

声の限り叫んでみるけど、誰も振り返りません。聞こえてませんね。予想通りだけど、ちよつと落ち込みます。

「でもあの話、本当かしら、世界が減びるとかい噂……」

「確かに星原樹もおかしいし、変な噂が流れるの、わかるわ」

なんか凄い噂が流れてるんですが！ 私が知らない間に何があったんですか。

私はさりげなく交ざります。隣のお姉さんのドレスから生えてるけど、許してね！ それにしても、さすがは星都。お付きの人たちの言葉もどこかお上品です。

「勇者様もご帰還されたけれど、本当はまだ帰られる予定ではなかったらしいわ」

「神子様も体調不良とかでずっと出ていらつしやらないし」

思わぬところに私の話題です。びくつとするよ！

「騎士団に召集が掛かっているそうですよ」

「魔物の出現が多くなっているのに、前線から呼び戻しているとか」

「変ですよ、今まで地方に派遣していたのでしょうか？」

皆、話しながらだんだん青ざめてきています。そりゃあ、こんな話題だったら暗い顔にもなるよ。わかりますその気持ち。

「それに、なんだか新しい術を研究するって、魔法使いが呼び集められているみたい」

「魔法使いがいると、魔物が来るって話もありますよね」

皆さん抱える不安が同じなのか、話せば話すほど顔が暗くなっていきます。

「でも勇者様がいらつしやるんだつたら……大丈夫よね？」

一人がちよつと明るく言います。そうそう、と他の人も同意して、あとは少しほかの話になって、そのままなんとなく廊下での会話は終了しました。お付きの人たちは解散

していなくなります。私はその場所で留^{とど}まって、聞いたことを頭の中で整理してみました。勇者様たち、帰還^{きかえ}していることは、ここにいらつしやるんだ。……お会いできるかなあ。

私が放置されているのは、寝こけているのが秘密にされているせいですね。本当にすみません、早く体に戻って仕事を再開します。こんな大変な時に眠りっぱなしって、確かにひどすぎる。なんでこんなに寝るようになったんだろ。むむむ、考えても答えは出ません。

やっぱり私は見えないみたいだし、探検しても手がかりはなさそうです。だったら、体の近くで帰るか試した方が良さかも。よし、ささっと帰って、体に戻る方法を見つけよう！ 噂レベルでも大変なことになっている現状、猫の手も借りたいはず。つまり、私でも何らかのお手伝いができる可能性がある……かもしれない。役に立てればいいけれど。そ、そのためには体に戻らなきゃいけないしね。よし、帰ろう！ ついでに生き返ろう！ やり方はわかりませんが。

私は気合を入れてさつき通った道を思い出しながら引き返します。

途中、何人か掃除の人とすれ違いました。お疲れ様ですー。聞こえないだろうけど、大きな声で挨拶しました。結構な数の人が掃除しています。これが裏方の仕事ですか。

こうやって星都^{せいと}の美しさは維持されているんですね。社会勉強になります。右、左、ここで青い壺^{つぼ}が……あれ？ 壺……があったと思うんだけど。記憶違いかな？

その時すれ違った人を、私はそのまま目で追いました。あ、青い壺持ってる。ああそうか、移動させているんですね。だからさつき見当たらなかったのか。じゃあ、ここが壺の曲がり角かな？ とりあえず勘で、くりつと左に曲がりました。どこもかしこも同じようなデザインだから迷うんだよね。えんえんと続く赤いじゅうたんと白い壁、似たような扉！ 本当にここに就職した人は大変だろうなあ。どこかの部屋を掃除してこいつて言われても、私だったら、まず部屋にたどり着く自信がないです。

……そうだね、たどり着く自信がないね……

なんでじゅうたんがここから緑？ じゅうたんがこんな色のところには、来たことがありません。

明らかに違う雰囲気がありました。壁の色も茶色の木目が混じったり、これまでと違う落ち着いた雰囲気になります。兵士さんが……いや、鎧^{よろい}が立派だから騎士様かな？ 廊下でうろろしているのを見る回数が増えました。道、間違えているよね。でも大丈夫。ここで私の無駄知識が発揮されるのです！

前、教えてもらったことがあります。王城と神殿は繋がっていて、星原樹^{せいげんじゆ}をぐるつと

囲むように建てられていって。つまり、こうやって辿っていけば一周してそのうち帰れるはず。だって壁抜けも余裕ですから！ 浮遊霊になると、そのあたりの心配はなくなりませぬ。これはこれでお得なのかも！ この状態なら、一人で街も歩けます。悪い人にだまされないうし、食べ物で釣られることもありませぬ。おお、新しい発見。今度体に戻ったら、自分の意志でこれになれるか研究してみよう。

戻れたら、だけど。

廊下をふわふわ歩きながら、だんだん落ち込んできました。

だって、誰も反応しないんだもん。私が見えないみたいで、知らない顔して皆通り過ぎていきます。ここにいるのに、見られないってかなりショックです。じわじわと心が削られていきます。幽霊も、心が強くなければできない職業だったんですね。安易なジョブチェンジは危険でした。自分からなつたんじやないけど！

誰にも見られない私。

もしかして、このまま勇者様たちに出会っても、気づいてもらえないかもしれませぬ？ お二人に無視されたら、本気で立ち直れそうにないよ。ちよつと想像したら、それだけでじわりと涙が出てきます。体に帰れるかなあ。なんでこうなつたんだろ。

目元を擦りながら歩いていって、廊下からはみ出て、どつかの部屋に踏み込ん

じゃいました。得意の壁抜けですよ。とりあえず、一歩先が外じゃなくて良かった。こは一階じゃないから、壁抜けしたら、足元なくてびゅーって落ちそうな気がします。幽霊だけど、落下するよ！ ……たぶん死なないけど。死なないよね？ なんだか死んだかもって思ってから、いろいろ考えたことが頭を駆け巡ってなかなか涙が止まりませぬ。つまり、寂しかったり、混乱してたり、怖かったり、そういった感情が頭の中にこびりついて、それがじわじわ出てきた感じ。感覚もないのに体が冷えてきた気がします。気分は、地面にめり込むぐらいどん底でした。

泣きながらとぼとぼ歩いていたら、また違う部屋に入り込んでしまいました。もう既に現在位置が全く不明です。ふと目をあげると、この部屋には人がいました。

目つきの凄く悪い男の子が、大きい椅子に座って何か書き取りをしていました。お勉強ですか？ 貴族っぽい、ゴージャスな衣装を着ています。

幽霊な私なんて見えないだろうけど、お邪魔してゴメンなさい。

一応頭を下げて出ていこうとすると、

「昼間から泣きながら徘徊するな、うつとうしい」

と、男の子がぼそつと呟きました。私は周りを見回します。部屋には誰もいません。

「その女、お前だ」

へ、私ですか？ 驚きすぎて涙が引つ込みます。

男の子は書き取りを中断して、顔をあげます。そのまま私を睨みつけてきました。濃い紫色の目で、白金の髪、お人形さんみたいな容貌の男の子です。が、目つきの悪さが全てを台無しにしていました。私より幾つか年下ぐらいです。

半信半疑で見返したら、バッチリ目が合いました。そして睨まれました。

ひい！ あまりこんな風に睨まれるのは慣れてないから体が固まります。

「幽霊なら幽霊らしく、夜中に出ろ」

口の悪さもいろいろ残念ですよ、少年！ そこまで考えて、今のセリフの意味に、やつと気づきました。少年は私を無視して、書き取りを再開します。

え、私が見えてるの？

『あなたは、私が見えてるんですかっ！』

勢いよく言った台詞に、少年からは鋭い一瞥が飛んできただけでした。目つきが悪いから、倍怖いですよ。

み、見えているんですねっ。了解しました。

『あの、他の人には私は見えるんですか？』

明らかに年下だけど妙に威圧感がある少年に、私は正直気後れします。生まれつきの

目元なのか、機嫌が悪いのか悪くないのかわからない目つきの悪さです。ちよつとイラツとしたのか、羽ペンに力が入りすぎて、今、インクが飛びました。うう、見ちゃった。どうやらご機嫌斜めの方で正解のようです。そうだね、書き取りの途中だったら邪魔ですね。

『……か、書き取り終わったら教えてくれますか』

ちよつと少年に近づきながらお願いすると、少年は書き取りの手をやつと止めて、こちらを見上げました。んん？ 誰かに似てる気がするんだけどなあ。少年は不機嫌そうにそのまま私を見上げます。目つきの悪さは倍増です。ひい！ 怖いっつて！

「お前はほくを知らないのか」

なんですと。予想外の言葉に私はぼかーんとしました。口が開いたのを、ぱくんと閉じます。また口を開けてしまいました。危ない危ない。

少年は有名人だったようです。でも誰だろ。思い出せません。さつき思った、どこかで見たっていうのはそのせいかな。じーつと少年を見つめます。思い出すかな……。すると、少年がものすごく嫌そうな顔になりました。

「自国に出る幽霊にさえ顔を覚えられていないのか……」

少年は遠い目をして溜息をつきました。と、年に似合わず重い溜息ですね。

『有名人なんですか？ すみません、田舎者なので存じ上げてないみたいです』
正直に謝ると、少年は微妙な顔のまま、

「いい」

と言いました。で、少年は一体誰なんでしょう？ 質問をしてもいいのかな。私はさつき聞いたことを繰り返してみます。

『で、あなたは誰ですか？ で、私って他の人にも見えるんですか？ あなたにだけ見えるんですか？ それと、ちよつと迷ったんで、ここがどこかを聞きたいんですけど！』

「一度に言われて答えられるか！」

あ、ごめんなさい。ですよね、一度に言われたら、私でも覚えられないよ！ 神官様ならできそうなところが恐ろしいです。数人の言うことを聞き分けられるんじゃないでしょうか。勝手な思い込みですが。

「とにかく名乗れ。話はそれからだ」

名前ですか！ えーと……つまり、あの名前を言わないといけないんですか。これはとんだ羞恥プレイ！ まさに時間差攻撃です。今まではだいたい神官様が紹介してくださっていたし、相手があらかじめ私のことを知っていました。だから、自分で言ったことは滅多にないんです、あの恥ずかしい名前……。いじめですか、いじめですね！

できることなら断りたいです。

『えーと……、言わなければならぬですか？』

少年の顔が渋いものとなります。うっ、明らかにイライラが倍増しています。言わなきゃ勘弁してもらえなさそう。

「お前は星術に詳しいのか？ ぼくも保険が欲しい。悪いようにしないから、きちんとした名を名乗れ」

少年の使う言葉が難解すぎて、私にはさっぱりです。年下だといってなめるなっていう意思表示でしょうか！ ただ単に、私が馬鹿なのかどうかは、横に置いてくださいなね。

『共通語で、平たく、わかりやすく、今のお話の解説をお願いします！』

どーん。正直に言いました。なんで名前で星術なんだろう？ さっぱり意味がわかりません。かといって、なんでも知ってる大先生の神官様はここにはいませんから、解説を要求することなどできません。代わりに少年に聞いてみます。

少年は鼻を鳴らしました。ちよつと馬鹿にしたような感じです。小生意気ですね。

「自分の身元を明らかにしてから挨拶するのは、基本だろう」
偉そうに少年は言いました。

『で、星術(せいじゆつ)がどうか言うのはなんなんですか？』

「力の強い人間なら、名前を呼ぶだけで相手を支配できるらしいぞ。世界は韻律(いんりつ)とかいうものの力が強いから、言葉に縛(しば)られるんだとか」

初耳(はつみみ)でした！ 少年はいろいろ知っているんですね。一部単語が怪しいとはいえ、私よりは確実に。……うう、私はやっぱりお馬鹿(ばか)なんじゃないか。そういえば、私はあまり人の名前を呼んだことがないかなあ。覚えられないのもあるけどね！ あれ、お馬鹿疑惑(ぎご)がさらに濃(こ)くなりました？

気を取り直して、質問を続けます。

『でもそんな怖いことってあるんですか？ 相手の名前を呼ぶだけで、悪いことし放題じゃないですか』

「馬鹿、普通できるわけないだろ。できるのは勇者殿とか特別な人くらいだ」

へー勇者様たちくらいかあ。凄いね！ だから名前を呼ばないんだなあ。

『勇者様たちって凄(すごい)いんですね。教えていただいてありがとうございます！』

少年は不機嫌(ふきげん)そうにぶいっと横を向きました。耳が真っ赤(あか)になっています。照(あ)れていませんね！ 肌が白いから、余計(ま)にわかりやすい！

「で、ここまでよくが説明(せつめい)したんだ。お前はさっさと名乗れ」

うっ、きましたね。てっきり忘れてくれたんだと思っていました。私(わたし)だったら絶対(ぜったい)忘れていきますよ。あ、私が忘れやすいだけですか、そうですか……

とりあえず私が名乗(な)れる名前は一つだけです。背筋(せきす)を伸ばして、恐(おそ)る恐(おそ)る名乗ります。『えーと。は、はじめまして、神子(みこ)といえます……』

緊張(きんじやう)と羞恥(しようち)のあまり挙動(きやうどう)不審(ふしん)に挨拶(あいさつ)すると、少年は思(おも)いっきり不審(ふしん)そうな表情(へいしやう)で振り返りました。

「おまえが？ 神子様(かみこさま)はご病気(びやうき)だと聞いたぞ」

うう、目線(めせん)が痛い。少年の目つきがドンドン悪(わる)くなっていますよ。街(まち)で彼(かれ)が歩いていたら、チンピラ(ちんぴら)に絡(か)まれそうなくらい。怪(あや)しまれているのはわかります。その名前からしたらもつとキラキラしい人間(にんげん)が出てくるはずですよー。残念(ざんねん)！ 神子(かみこ)は私(わたし)でした。なんともガツカリな事実(じじつ)です。

『病気(びやうき)かどうかはよくわからないんですけど、気がついたら幽霊(ゆうレイ)状態(じたい)でした！』

「幽霊(ゆうレイ)では、なんとも名乗(な)れるだろ」

あつ、少年(せうねん)が私(わたし)を嘘吐(うそつ)き呼(よ)びわりしているっ。えーと、えーと、あ！ そうだ。

『私の名前(な)、【O/MvVvK0】とこうゆうですー』

ちゃんと星語(せいご)で名乗(な)ってみると、少年(せうねん)があんぐり口(くち)を開(ひら)けました。顎(あご)の下(した)に手(て)を当て

て閉じたいぐらい、見事に口が開いているよ。その反応はちょっとひどくないですか。さすがの私でも、ちょっとびり傷ついていますよ！

「本物か……これが」

少年のガツカリ具合が加速しました。

「そう言われてみれば、父上との謁見えつけんで見たのと似ているな……はあ」

溜息が重いですよ。ガツカリさせてゴメンね！ でも、そこまで落ち込むってどうなの。あの時は着替えさせられて、何割かは盛ってたのですよ。いろいろ盛ってましたから！ 主に、私を盛った侍女さんたちの力ですよ。今の私がむきだし私です。けどぶっちゃけ聞いたのはそつちだから、私は悪くないです。やつぱりキラキラゴージャス美人が一般的な神子みこ様のイメージなのかな。

「本物ならしかたがない。ほくはこの国の王子だ。一応、来年には立太子の予定だった」
へー王子様。

『お、王子様ですか！』

え、王子様ですかあああ！ これが、これが存在感が薄いついていう噂の王子様ですかっす。すごい！ 私思わず拍手します。生王子様ですよ！ レアです。じっくり観察するべき？

「おまえ……馬鹿にしているのか？」

そんなめっそももない！ 思わずぶんぶん首を振りました。王子様は私をじつとりと睨にらみます。

『ところで立太子ってなんですか？』

また出た王族用語の解説を早速要求してみます。王子様は肩を落とし、めんどくさそうな顔で、

「次の王様になる王族を決める儀式のこと」と付け加えました。

ふーん、そうかあ、大変ですねえ。そういうえば聞いたことがあります。この国では女性、つまり姫様たちじゃなくて、男性の王子様が継ぐのが慣わしなんだって。

家業を継ぐのはいろいろあるって、パン屋のおかみさんも言っていました。跡継ぎのお兄さんが、「冒険がオレを呼んでいる」とか叫んで失踪、おかみさんが急にパン屋を継ぐことになったそうで。けど、当時、おかみさんは隣の婚約者の家に嫁よめぐ予定だったから、パン屋をどうするか、かなりもめたんだって。でもなんとか旦那さんの両親を説得して、旦那さんにお婿むこさんに来てもらったそうです。いろいろ大変だったけど、二人の愛で乗り切ったと言っていました。愛って凄いな。最終兵器だよ！ とにかく、跡継

ぎ問題っていうのはかなり大変だと聞きました。

そうだね、庶民でも家業を継ぐのはかなり大変なことなのに、王様ってとんでもないですよ。庶民には想像もできません。キンピカの椅子に座って、臣下の言葉に適当に頷いて、「よきにはからえー」って言ってるだけじゃなさそうだし。あ、一般的イメージですよ。

『だからいっぱい勉強しているんですね！』

感心しながら王子様の手元を見ます。書き取り、綺麗な文字ですね。内容……難しすぎて私にはわからないですよ、これ。法律ですか？ むむ、ただの目つきが悪い少年じゃなかったのか……そうだ、少年じゃなくて王子様だった。失礼しました。

『でももういらぬ。書き取りをしても、すべてむなし！』

急に何を悟ってるんですか？

『若い身空で、何を言ってるんですか！ もっと若者らしくこう、はじける感じで行きましようよ！』

王子様はものすごく呆れた顔をしています。えー、なんですかその反応。不満げな私に、王子様は頭を抱え込み机に突っ伏しました。伏せた下から、また溜息が聞こえます。こうしてみると金の髪の毛がお姉さまがたに良く似てますね。あ、つむじ発見。つつき

たいな。それをぐっところえて、意気消沈している王子様の肩に、透明ながらも手を置くふりをします。

『まあ、元氣出してくださいよ』

「……幽霊に励まされても」

はっ、そうでした。私、幽霊ですよ。

『幽霊だからこそ、いろいろ後悔しちゃうんですよ。思ったよりも、命は大事です。やっぱり一人に一つしかないようです。うっかり失くすこともあります。もうちょっと頑張ったらよかったな！って、こうなってから思い知りました！』

そこで何か大変なことに気づいたらしく、王子様ががばりと顔を上げました。

「というか、本当にお前が神子様なら、死んでいるのか？ なんだだ！」

『えっ、死んでないですよ？ 勝手に殺さないください。ちょっと体に戻れなくなっただけでっ』

「それが大問題だろうが！」

おお、王子様の突っ込み。王子様は突っ込みもロイヤルかと思いきや、意外と普通でした。確かにロイヤルな突っ込みってなんだって話ですよ。

正面から顔を拝見して、改めて国王一家の肖像画を思い出します。画家さんは姉弟を

似せて描いてました。目つきはさすがに修正されていたと思います。唯一の王子様なのに、一番影が薄い殿下として有名でした……。実際、お会いしたはずなのに顔を覚えていませんし。姉上たちが濃すぎるのもよしあしですね。影が薄いつていうことは、普通な方かと思いきや、幽霊と会話する王子様だったとは。やはり彼も濃い人物だったようです。

『私も、どうして幽霊になったか覚えてなくて。体にも戻れないので、散歩している途中です』

王子様は、眉間にギョツと皺しわを寄せました。今からそんな顔してたら、皺しわになっちゃって、ずつとまぶしそうな顔になりますよ。大人になって癖になるから、やめた方がいいんじゃないでしょうか。

「……そうだな、こんなに会話がが続く幽霊もおかしいし。あいつらとは気配が違うから、生きているっていうのを信じてやる」

信じてくれるようですよ！ やった！

『普段から幽霊をよく見るんですか？』

王子様はゆううつそうに頷うなずきました。本当に、この王子様、笑顔以外の表情ばかりですね。勇者様みたいに無表情も怖いけど、こんな風にアンニュイなもとつつきにく

いです。

「大体は自分の恨みうらみつらみばかりを言いたがるな。例えば、その端つことか」

へ？ 王子様が指差した先を見ると、確かに黒い霧霧に覆おほわれた半透明の何かがつ。昼間なのにその一角は妙に薄暗いんです。よく目を凝こらしていると、もごもごする何かが見えました。どう見ても、あれは！

『ひ、ひゃあああ!! 幽霊ですよ!』

私は悲鳴を上げる。だって幽霊ですよ！ 初めて見た！ 自分以外で初めて見た！ こっち来ないってわかってても、怖いんです。耳を澄ませば、何か言っているのがちよつと聞こえます。聞きたくないけどつ。

——ウァァァァ、辛い、苦しい……なんで私だけが、辛い、許さない……ァァァ……じよ、女性の方だったみたいですね。ずつと同じことを吠わいています。ひいひい！ 聞かなきゃ良かった！

私、幽霊だけどトリハダ立った気がします！ とにかく怖いっ。

「お前も仲間だろうが。王城にはゴロゴロいるだろう」

私がるさかったのか、耳をふさいだ王子様の突っ込み。

お、同じかな？ 同じなのかなあああ！ ということは、王子様は日常的に幽霊を見

ているようです。それにしてもあまりにも平然としています。ある意味、大物ですねつ。そんなに幽霊ってゴロゴロいてたまるかって思うのは私だけ？ 今までの人生では見てないけどつ。

『あんなに怖いのと、一緒にしないでください！ 私は善良な一般幽霊ですつ』
 とりあえず、違いを主張してみます。祟^{たた}つたりしないよ、体に戻りたいだけだよ！ ささやかな願いです。確かに毎日あんなに怖いのを見ていたら、顔がアンニユイにもなりますよね、王子様。いささか同情する私。

「とにかく、神子様なら早く生き返れ。世界はあと四十七日で滅びるらしいから」

ひらひら手を振って、王子様は私を追い払おうとしています。失礼な。ムツとしてから、王子様の発言をようやく呑み込みます。

……は？ なんですとつ。

え、ちよつと待つてください、いつの間に世界が滅びることが決定しているんですか！ 幽霊ながらも自分が青ざめたのがわかります。ええええ、一体何が！

『おおお王子様つ、いつの間にそんなことになってるんですか！』

「三日前に星原樹^{せいげんじゅ}が停止し、滅びまでのカウントダウンが始まったらしい。ただ、魔物を全滅させれば、なんとかなるとかならないとか」

王子様は少年らしからぬアンニユイさを漂わせたままおつしゃいます。た、確かにゆううつな話題ですね。でも、なんとかなるのか、ならないのか、はっきりしてください！ そこ、大事じゃないんですか？

『私、全然知りませんでした！』

慌てて忙^{せわ}しない動きになりますよ。逆になんで王子様はそこまで落ち着いていられるんですかあああ！ ぐるぐると王子様の周りを回ってみます。お、落ち着け自分！

……魔物って、全滅なんてさせられるの？ 白さんが言っていたことを思い出します。瘴気^{しょうき}は、人が絶望したり、暗い心を懐^{いだ}くと生まれるつて。魔物が生まれないようにするには、みんながしあわせにならなきゃいけない、とかなのかな。本当のところは一体どうなんだろう。この知識もまた白さんによるトンデモ知識っぽいから、神官様以外に聞いたら大変なことになりそうだし！ ど、どうなるんだあああ。そりゃあ勇者様たちを見かけないわけです。とんでもなく忙しく働いていらっしやるんじゃないかな。たぶん世界各地を飛び回ってるはず。すみません、寝ててごめんさい！

とにかく、と話を一旦切る王子様。

「そのせいで何もかもむなし……」

頬杖^{ほおづえ}について遠い目をしています。相変わらず溜息^{なげ息}が重苦しいですね。私は足を止め

て王子様を見ました。

『あ、いや、その、慌てても仕方がないんですが、そこまでゆううつにならなくても』
 「まだ力がない。だからできることがない。剣でも姉上に勝てないし、何かをするにしても権力がない。会議にも出席できない。できることといえば、大人の邪魔にならないように法典の書き取りをするぐらいだ」

うっ。その言葉が私にも突き刺さります。みんなが忙しいのにできることが少ないって、意外とプレッシャーですよ。私はお枝様運搬係です。それ以上でもそれ以下でもない、それだけです。しかも星原樹が停止したならお枝様を持ち歩いて意味がなさそう。神子みことかいうけど、実際のところは役立たずです。この状態で私が体に戻ったとして、何かできるのかな？ ちよっと落ち着いてきました。あれ、逆に寝てた方が大人しくていいんじゃない？ 自分の役立たずっぷりに驚きますよ。

『何か、できることがあればいいんですけどね』

王子様の横で、床に座り込んで、私もゆううつな溜息をこぼします。ゆううつがうつてきました。恐るべき感染力ですね。うーむ。

『落ち着いているな、お前。あ、いや、神子様だったか』

もう呼び名はどっちでもいいです。むしろ、王子様の口調なら「お前」の方がまだ違

和感が少ないです。王子様を見上げると不思議そうにこちらを見ていました。

「世界が減びると聞いた途端、大人たちが右往左往しだしてな。どこに逃げようかと言い出すやつもいる始末だ」

その言葉に私は首を捻ひねります。

『でも、皆さん普通どおりに生活していますよね？』

大騒動が起こったように見えなかったな。さっきのお付きの人たちはそんな話はしていなかったし、掃除の人も普段通りに業務をこなしていた感じ。皆、もっと混乱しそうだけ。

「あたりまえだ。上層部で方針が決まっているのに、民草たみくさに周知できるか」

ふん、と鼻を鳴らしながら王子様。尊大な態度が似合ってますね！ 影薄いかいいう噂、信じてごめんなさい。これから目つき悪くてちゃんと態度も悪くて、それなりに濃い人だったと言いますから。あれ、これだと悪口ですか？

『じゃあ、まだ特に対策が練られてないんですか？』

「今から各国の代表が会議を開催するそう。主神殿のセイヒツの間の近くらしい」
 へー。あのあたりか。白さんの天井画を発見したあたりかな。

『星原樹もセイヒツの間も綺麗なのに、みなさん見たことがないってもったいないです

よね』

私は廊下の彫刻を思い出しました。近づける人がいないエリアなのに、あんなに綺麗に装飾されているのが不思議で、神官様にどうしてか聞いたことがあります。

昔はまだ星原樹せいげんじゅに近づける人がこんなに少なくなかったとか。

星原樹の近くの彫刻は、信仰心がものすごく篤い人たちが何年もかけて作り上げたんだって。特殊な結界を張った上で作業していたという伝承だそうで、職人魂って凄いなあって思ったものです。恐らく時期的には、一期から二期で樹の近くの不思議な扉や建造物造って、四期初頭に天井画の制作が始まったとか。建築様式の鑑定をするとそんな感じらしい。神官様の知識は本当に半端ないです。

星原樹の近くの様子を思い出していると、王子様がこちらをガン見していました。な、なんですかあああ。その目つきで睨にらまれると怖いですっ。

『な、何か御用ですか』

怯おびえながら返すと、

「簡単にセイヒツの間に入れる方がおかしいだろう」

と王子様はおっしゃいます。そして、私をまじまじと見ました。

「名乗りを聞いて疑っていたわけではないけど、やっぱり神子みこ様なんだな」

王子様の中の神子基準は一体どんなですか！ とりあえず私みたいに庶民ではないことは確かだけどっ。

『大体ですね、神子とか聞いただけで夢を抱いちゃ駄目ですよ。現実を見据えてください！』

現実、つまり私。しかも今は幽霊状態。なんとという夢を砕く現実でしょう！ ……自分で言っちゃって辛くなってきた。うう。

「特に夢も希望も抱いていないし。いろいろむなしいなと」

またそこに戻るんですか。無気力だこの人。

『こう、もつと希望を持って生きましようよ！』

私はぐつと拳こぶしを天に突き出しました。

「この状況で？ 世界が減びるのに？」

王子様はアンニュイな表情のまま、左手に持ったままの羽ペンをゆらゆら揺らして、その先っぽをほんやり見えています。うう、目が遠い！

『こっ……、この状況だからこそ、です！』

自分でも無茶言ってるなって気はします。だけど、この主張は譲れません。

「勇者殿なら、何とかできるのか？ だから希望を持てと？」

王子様の問いかけに、私は首を振って否定しました。そうじゃないです。たぶん、いや、絶対勇者様たちは諦めてない。最後まで頑張ると思うんだ。実際、今までの危機はその時代の勇者様たちだけで世界のゆがみを突破してきました。そうして世界の危機は乗り越えられてきたって。だからこそ勇者様に頼る流れができています。

でも、本当にそれでいいのか。今回も、勇者様一人に重荷を背負わせていいのか？ 始まりはともかく、連れられて街を出たあの日から、私はずっと一緒に旅してきました。その間、お二人が一度も務めを放棄する姿を見たことがありません。そこまで頑張らなくてもいいんじゃないのかなと思う時もあるけれど、お二人は全力を尽くすんだよね。旅も楽しいことだけじゃありませんでした。勇者様一行にみんな期待と自分の希望を寄せます。自分の希望とおりにならなかった時、何故かお二人に不満の矛先が向きます。魔物が減らないのは働きが足りないんじゃないか、って領主様たちに見当違いの文句を言われていたのを見たこともあります。なんでもっと早く来てくれなかったって、八つ当たりされていたことさえありました。魔物が増えているのはお二人のせいじゃないの。そんな言葉を受けても、無言で戦いに行く姿を、ずっとそばで見してきました。

でも、だから思うんですよ。

『勇者様たちだけが頑張るんじゃないかって、本当はみんなが頑張らなきゃいけないんだと思うんですよ』
たった一人や二人では、本当は世界は変わらないんじゃないかな？ 任せちゃうんじゃないかって、みんなが頑張らなきゃいけないんじゃないかな。勇者様たちだけが辛いのおかしいと思うんだ。

「どうしてそう思う？」

王子様は身分が高いのに、私の眩暈にも真摯に耳を傾けてくれました。器、大きいですね。将来いい旦那様になりますよ！ 女の話聞く度量の大きさは重要だと、近所のおばあちゃんも言っていました。

神官様も知らなかったことだから、言ってもいいのかわからなかったけれど、意を決して口を開きます。

『魔物は、人の心の悪いところが漏れ出して生まれてくる仕組みになってるんです。だから、本当は勇者様たちだけが頑張っても、一時しのぎにしかならないんです』

王子様はただでさえ悪い目つきを更に悪くして、私を睨みます。そうなるのは、私のせいじゃないですよおお！ 視線の鋭さにざっくざっくと切り刻まれるよ！

「それは事実か？」

『本当だって、言っていました！』